

島中恵

若様組

子いる



講談社文庫
講談社文庫

|著者| 畠中 恵 高知県生まれ、名古屋育ち。名古屋造形芸術大学短期大学卒業。2001年『しゃばけ』で第13回日本ファンタジーノベル大賞優秀賞を受賞し、デビュー。他の著書に、本書の後日譚にあたる『アイスクリン強し』（講談社文庫）、『こいわすれ』（文藝春秋）、『さくら聖・咲く』（実業之日本社）などがある。近著は『ときぐすり』（文藝春秋）など。

わかさまぐみ
若様組まいる

はたけなか めぐみ
畠中 恵

© Megumi Hatakenaka 2013

2013年7月12日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——凸版印刷株式会社

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277540-3

目次

序

一章 番町の住人

二章 愛宕町

三章 起床ラッパ

四章 去りゆくもの

五章 東京

六章 巡査派出所

七章 明日のこと

終章

解説 堀川アサコ

452 442 387 319 265 207 147 77 13 9



講談社文庫

常州大学図書館
蔵書章

畠中 恵

講談社

目次

序

一章 番町の住人

二章 愛宕町

三章 起床ラッパ

四章 去りゆくもの

五章 東京

六章 巡査派出所

七章 明日のこと

終章

解説 堀川アサコ

452	442	387	319	265	207	147	77	13	9
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	---

登場人物一覽

【若様組】

長瀬 健吾……若様達の頭。二十歳。元二千石の若殿様。真次郎と沙羅は幼なじみ。
福田 春之助……二十三歳。元千石の若殿様。
園山 薫……二十歳。元三千石の若殿様。
大熊 金太……二十二歳。元三百五十石の若殿様。
高木 順之助……二十三歳。元八百石の若殿様。
平田 文太郎……二十歳。元二百五十石の若殿様。
小山 孝……二十一歳。元三百石の若殿様。
小沼 武一……二十二歳。元五百石の若殿様。

【薩摩組】

玉井 和馬……薩摩出身。二十二歳。三男。実力者。
近藤 正之助……薩摩出身。二十五歳。
矢野 良次郎……薩摩出身。二十四歳。

【静岡組】

佐久間 一義……二十四歳。元旗本。維新と共に、徳川宗家について、静岡へ行つ

た者の子息。

宮木 信成……二十二歳。士族。静岡より上京。

牧 忠行……二十一歳。元旗本。維新と共に、徳川宗家について、静岡へ行つた者の子息。

【士族組】

西岡 義久……会津出身。二十一歳。

【平民組】

姫田 新七……二十一歳。明治に成り上がった商人の息子。妾腹の次男。

土谷 元吉……二十二歳。商人の息子。三男。

岩井 清松……二十五歳。商人の息子。

辻 三平……二十歳。商人の息子。

【若様 知人】

皆川 真次郎……二十歳。長瀬、沙羅の幼なじみ。西洋菓子職人志望。

小泉 琢磨……小泉商会当主。成金。

小泉 沙羅……十四歳。小泉琢磨の娘。

北尾 百合……十七歳。福田の恋人。

【巡查教習所 運営】

田中 石之助……所長

有馬 将勝……幹事

【教師 教師補】

浜木 功

黒田 信二

林 欽一

【武道師範】

中村 友男

羽生 実

川畑 元雄

下津 六郎

伊吹 忠一

若様組まいる

序

十五歳、江戸の昔で言えば、元服を済ませた齡としのことであつた。

ある晴れた日、長瀬ながせは縁側に腰掛けていたとき、綿のように白く盛り上がっている空の雲へ、手を伸ばしたのだ。

当然、指には欠片かけらも引つかからなかった。空の雲は、きつと真下ましたに行けば、端から端まで見渡せない程大きい。なのに、長瀬はその欠片にも、手を掛ける事が出来ないのだ。

すると、珍しくもその日、昼間家にいた父親が縁側に出て来て、息子の幼子おさなこのような行いに、笑みを浮かべた。

雲が欲しいのかと聞かれたから、多分、違うと答えた。

あれは大きい。誰の目にも見える。

なのに長瀬は多分永遠に、雲に触れる事がない。

それが悔しい。

不安にも感じる。

何だか心細いようにさえ思えてしまう。

たかが雲の事を、そんな風に考えてしまう己おのれに、あきれてしまう。

まだ子供だから、己は雲など掴つかみたいのだろうか、長瀬は父に問うた。二十歳を過ぎれば、大人になるのか。周りも認めるのか。そしていつと、ちゃんとした行いが、出来るのであろうか。

すると、父が何だか楽しそうに、ふふと笑った。その答えは、五年後の自分に問うてみればいい。そういうのだ。

若い頃の時間は、永遠かと思う程に長い。しかし時の流れは、坂道を駆け下る程、早くもあるのだそう。

五年は長いと思つたら、悩みが積乱雲のように、高く高く積み重なって行く内に、二十歳を迎えた。五年前の己に返す答えだけは、得ることとなつた。

若かった自分が、怒るような答えしか得ていない。しかし二十歳になり大人と呼ばれたからといって、突然聖人君子には成れないことだけは、知ったのだ。

何しろ、謎なぞも悩みも、叫び出したい程の思いさえ、減るところか空に達しそうなほど、増えに増えている。それを、たかが二十歳の己が、何もかも解決出来る筈はずがないではないか。

その事を、自分で分かっただけ、良しとしよう。今は勝手にそう考えていた。

そして長瀬は、長く続く坂道を、転ぶ事も構わず、全力で駆ける事が出来るようになつていた。

走つて、走つて、全速力で前のめりに行けば、いつか雲の立ち上がる場所にまで、行き着く事が出来るかもしれないではないか。そう友に言ったら、馬鹿ばかな奴やつと、明るい声で笑われた。

そして友らは、その遠い場所まで、一緒に行きたいもんだとも言ったのだ。

一章 番町の住人

